

天野郁夫著「高校と大学の間」IDE 現代の高等教育 NO524 高大の連携と接続 2010年10月号、IDE 大学協会 2010年10月1日刊を読む

高校と大学の間 - 高大の連携と接続 -

1. 接続・交流・連携と、最近は高校と大学の関係がさまざまな言葉で語られるようになった。高校と大学との関係といえば、入試の一点だけで語られてきた時代に比べて、激変とってよいほどの変わりようである。
2. 今は死語に近くなった「象牙の塔」や「学問の府」という言葉に象徴されるように、大学は長い間、高校以下の学校とは全く別の、独自の教育と研究の世界と見なされてきた。
3. 少なくとも大学関係者はそう考え、信じてきた。ところが気がついてみたら、高校以下の学校と大学は地続きになり、大学と高校の関係は入試の一点だけでなく、もっと大きな広がりを持ち、いってみれば面で構成されるようになっていた。接続・交流・連携などの言葉で語られているのは、そうした変化によろやく気付いた大学側の、高校との関係を理解し再構築するための、懸命の努力の表れといえそうだ。
4. 変化をもたらしたのは、高等教育のユニバーサル化である。高等教育進学率が 50 % を大きく超え、今では誰もがユニバーサル化という言葉の口にするようになった。ただ「高等教育」という用語は、なかなかの曲者である。どのような教育機関を高等教育のカテゴリーに加えるかは、国によって同じではない。わが国でも、20 数%の進学率を持つ専門(専修)学校を入れるかどうかで、大きく違ってくる。それを加えれば、1980 年代末にはすでに 50 % を超え、いまでは 80 % に近い数字になる。つまり、ユニバーサル化は、四半世紀前にすでに始まっていたことになる。
5. ユニバーサル化は高等教育に先行して、中等教育で起こるということも忘れてはならない。高校のユニバーサル化なしに、大学のユニバーサル化はありえない。高校進学率が 50 % を超えたのは 1950 年代の中ごろ、80 % を超えたのが 70 年代の初めである。こちらのユニバーサル化は、半世紀近い歴史を持っていることになる。つまり、ユニバーサル化による高校と大学の関係変化は、もう何十年も前に始まっていたのである。
6. ユニバーサル化はたんなる量の問題ではない。進学率の上昇は高校と大学の双方に、質的な変化をもたらさずにはおかない。変化するのは、なによりもまず生徒や学生の質である。具体的にはそれは学力や、進学・学習への動機づけの違いとなって現れる。さらにその基底には社会や世代の価値観の、大きな変化が隠されている。教育の内容や方法、学校の組織や教員の資格や職務は、それに遅れて変革を強いられる。

7. ユニバーサル化の先行した高校での生徒の質的な変化は、高校関係者の中で早くから認識されていた。高校の制度や組織も、教育の内容大きく変わった。それが問題として認識されなかったのは、大学側が高校との関係を入学者選抜、それも「入学試験」の一点でしか、とらえていなかったからである。
8. 立ちいった説明はできないが、入学試験中心の高校・大学関係は、高等教育のエリート段階、あるいはマス段階のある時期においてのみ、成立可能である。マス化・ユニバーサル化が進めば、入学試験一本の入学者選抜は維持することが不可能になっていく。指定校推薦から一般推薦、一芸一能入試、さらには AO 選抜と、学力の軽視あるいは無視の選抜方法の多様化が推進されてきたのは、そのためである。大学側の認識は、自分たちが推し進める入学試験以外の選抜方法による入学者が、多くの大学で多数を占め、従来型の大学入試が「一般選抜」と呼ばれるようになってようやく、変わり始める。
9. 進学してくる学生の質の変化は、ユニバーサル化の進展とともに、高等教育システムの周辺部から次第に中心部に、いわゆる「一流校」にまで及んでくる。1990 年代の末になって、旧帝大系の大学教員までが学生の学力低下に警鐘を鳴らしはじめたのは、その象徴的な表れとあってよい。今では補習教育や初年次教育、FD の実施などは、程度の違いはあれすべての大学の課題になっている。高校への関心の高まりは、そうしたユニバーサル化のもたらした、必然的な結果の一部とあってよい。
10. 接続・交流・連携など、さまざまな言葉で呼ばれる大学の高校への働きかけについては、新卒の学生募集、学生確保の方策に過ぎないという、冷やかな見方もないではない。しかし、変貌した高校の現実を見据え、同時に大学自体の変貌を高校側に伝えようという努力を、否定的にだけとらえるべきではあるまい。問題は、大学側がユニバーサル化の投げかける変革の課題を、入学者の選抜や確保の問題を超えて包括的・構造的にとらえ、新しい関係の構築を自覚的・主体的にはかる理念や力を、どこまで持っているかにある。
11. ユニバーサル化は、個別の大学にせよシステム全体にせよ、入学試験、あるいはそれを含む入学者選抜という一点だけで、大学と高校の関係をとらえ再構築することを不可能にする。「高大接続テスト」と仮称される、新しいタイプのテストの導入が議論されているようだが、問題はそうした技術的な対応を超えた広がりを持っている。さらに言えば高校と大学の新しい関係は、高校教育とは何か、大学教育とは何かという基本的で、本質的な問いを抜きには構築しえないというのが、ユニバーサル化が明らかにした現実である。高校側に交流や連携を働きかける大学は、それが学生確保の新手段に止めることのできない、広がり大きな問題だということを、肝に銘じておかなければなるまい。大学は自らの理念や力量、さらには高校教育に対する責任感の大きさを問われている。

[コメント]

- 1 . 高校のユニバーサル化、大学のユニバーサル化があるとの考えはその通りであると考え。
- 2 . 高校の進学率がほぼ 100 % になったから、専門学校を含む広い意味での高等教育への進学が 80 % を超えてきたのであれば、高校と専門学校を含む高等教育機関がより連携を深め、お互いの教育の質保証を含め教育の質的向上のあり方、具体的方法を国民に提示する責務があるように思えてならない。
- 3 . 言いにくいことではあるが、他の国で行われていて日本で全くと言ってよいほど見られないのは、高校における出席日数不足ではなく、各科目の不十分な学力のための進学見送り、つまり留年である。日本の高校では出席が不足する場合でも出席日数の計算は極めて弾力的に行われ、できる限り留年が出ないような配慮が行われているようだ。どのような授業への参加の仕方をしようが、また、どのような点数を定期試験で取ろうが、犯罪行為類似の非行がなく、出席日数さえ不足しなければ留年はないのが日本の高校の実態であるようだ。
- 4 . オルティガが「大学の使命」で訴えていたように、大学にとっての最大の問題は、だらしなさ、ぞんざいさである。大学教育の前提は高校での基礎学力であり、高校卒業生として自律的に活動できる能力を身につけていることである。現代は高度な知識基盤社会であり、国際化社会、超少子高齢化社会であるからだ。
- 5 . 高校卒業生の全員が高等教育機関に進学し、その大半が大学院修士課程や博士課程で学ぶことは望ましく、そのような社会が一日も早く来てほしいと望む。
- 6 . しかし、大切なのは各々の教育機関の質的な問題である。日本は世界一の長寿国なのであるから、人生は長いと考え、高校や大学、短期大学、専門学校、大学院は今までの修業年限をもっと弾力的に考えたらどうか。すべてを単位制にして、早く修業したい生徒・学生は早く、時間が必要な生徒・学生は今までの 2 ~ 3 倍の期間を与えて、一定の学力が身についた者のみ次の学期や学年に進めるように制度の変更をすることを提言したい。
- 7 . 高校や高等教育機関でのユニバーサル化が進んだ今こそ、生徒や学生の学力面や行動面の「だらしなさ」からの脱却、つまり厳格な評価が求められる。

- 2010 年 10 月 11 日 林 明夫記 -